

國學院大學學術情報リポジトリ

命の道：歌句「命なりけり」の継承について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 和歌, 源氏物語, 西行, 斎藤茂吉, 歌句の継承 キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000066

命の道

—歌句「命なりけり」の継承について—

The Way of Life:

On the Inheritance of the Song Phrase “Inochi-nari-keri”

荒木優也

キーワード：和歌 源氏物語 西行 斎藤茂吉 歌句の継承

关键词：和歌 《源氏物語》 西行 斎藤茂吉 歌句的继承

要旨

平安後期の歌僧である西行[1118～90]は、その生涯に多くの修行の旅に出ている。そして、晩年近くには、生涯2度目となる陸奥行脚に向かった。『新古今集』987番歌はその際に詠まれた。陸奥行脚の1度目は30歳前後、2度目は70歳前後と考えられることから、40年ぶりに再び「さやの中山」を越えた感慨を「命なりけり」という表現で示した歌である。

では、西行はこの「命なりけり」という表現をどうして詠み出すことが可能だったのであろうか。それは『源氏物語』の桐壺更衣の歌を享受したから可能になったのだと考えられる。桐壺更衣詠の「命なりけり」には、生への強い執着が認められる。これは『源氏物語』に先行する和歌には見られない意味である。

「命なりけり」という表現は、桐壺更衣、西行、そして斎藤茂吉へと継承されて、人生そのものを語る表現として定着することになる。

本稿では歌句「命なりけり」の継承について論じることで、人生を詠み込む和歌の成立の一端を明らかにする。

摘要

西行(1118-1190)是平安时代后期的歌僧，生前曾多次踏上修行之旅。在晚年，他开启了一生中的第二次陆奥之旅。《新古今集》所收987号就是当时吟诵的和歌。西行的第一次陆奥之旅一般认为是在30岁左右，第二次则是在70岁左右。这首和歌使用“命なりけり”(只因生命犹存)的表达方式，抒发歌人在时隔40年之后再次越过“さやの中山”(小野之中山)的感慨。

那么，西行是如何吟诵出这一句“命なりけり”的呢？笔者认为，其原因或在于西行可能受到《源氏物語》桐壺更衣和歌的影响。在桐壺更衣所咏“命なりけり”一句中，可以看到对生的强烈执着。这种表达方式在《源氏物語》之前的和歌中是没有出现过的。

“いのちなりけり”这一表达方式，从桐壺更衣到西行，再被斎藤茂吉所继承，作为描述人生本身的一种表达方式而逐渐被固定下来。

本文通过围绕歌句“命なりけり”的继承进行论述，对以吟咏人生为主题的和歌的形成过程作一调查与揭示。

1、はじめに

西行の和歌に、西行の人生を読み取る人は多い。他の歌人の歌に比べて、西行の歌には西行その人の人生が描かれているように読み取れるからだ。そして、それが西行和歌を読む魅力のひとつとなっている。

たとえば『新古今和歌集』に収録されている次の歌はその最もたるものの一つであろう。

あづまのかたにまかりけるに、よみ侍りける 西行法師
としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山(羈旅・987)

当該歌は、『西行上人集』の詞書に「あづまのかたへ、あひしりたりける人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔に成りたりける、思出でられて」とあり、さやの中山を見たのが2度目であり1度目の昔を思い出していること、「あひしりたりける人」というのが平泉の藤原秀衡と考えられることから、西行2度目の陸奥行脚の折の歌と推測される。すなわち文治二年(1186)東大寺再建の勧進のため陸奥へ向かった旅である。

西行は、その生涯に二度にわたって陸奥行脚を行い、1度目は30歳前後、2度目は70歳前後と考えられることから、40年ぶりに再びさやの中山を越えた感慨を「いのちなりけり」という表現で示したのである⁽¹⁾。この「命なりけり」の「命」は西行の人生の来し方を感じさせる言葉となっているが、この表現を西行はどうして詠み得たのであろうか。

本稿では、歌句「命なりけり」の継承について論じることで、人生を歌に詠み込む和歌の成立の一端を明らかにする。

2、当該歌の解釈

まずは、当該歌を丹念に見て行こう。

初句「としたけて」は、年をとっての意味である。「たく」はここでは盛りを過ぎること、年を過ぎることであり、たとえば、『和漢朗詠集』に「年長毎勞推甲子（としたけてはつねにいたはしくかつしをおす）」（庚申・650／許渾）の句があり、「年をとってからはいつも苦勞して干支を数え（自分の）年齢を数えるようになった」（角川ソフィア文庫現代語訳）と年をとる意で「年長（としたけて）」が用いられている。

二句目「又こゆべしと」であるが、「べし」は意志または可能の助動詞である。ここでは、若い頃に越えたときに年をとってから越えることが出来ると思っていたらどうか、と可能の意でとっておく。また、この一句は孤例である。ただし、「こゆべし」については同時代に源頼政の「いかにして立ちのぼらんこゆべしと思ひもよらぬ和歌の浦浪」（『頼政集』雑・588）があるが、これは「正下の加階」（位階が昇進させられたこと）について詠んだものである。

三句目「おもひきや」は思っただろうか、の意である。「き」は過去の助動詞、「や」は反語を現す終助詞である。この「きや」は想像だにしなかった場合に用いられることがある。たとえば、「隱岐の国に流されて侍りける時によめる」という詞書のある小野篁の歌「思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは」（『古今集』雑歌・961／小野篁）では、隱岐に流される以前の都にいた頃には漁師のように縄を繰って漁をすることになろうとは思っただろうかとその境遇の落差に驚き嘆くさまを詠んでいる。また、「春の夜の夢のなかにも思ひきや君なきやどをゆきてみんとは」（『後撰集』哀傷・1387／藤原忠平）では、忠平が兄時平の死について「思ひきや」と詠んでいる。その一方で、恋歌でも「思ひきやあひ見ぬことをいつよりとかぞふばかりになさん物とは」（『後撰集』恋二・668／源信明）と詠まれるが、これは誇張表現の一種と考えるべきかもしれない。特に初句に置く場合は、倒置法による強い反語表現となるからである。当該歌の場合は、三句切れにして意味を区切ることで、四句目の「いのちなりけり」を強調している。

四句目が本稿において特に注目する「命なりけり」である。命であるなあ、の意味である。この歌句については、次節以降で詳しく述べていくが、他の和歌においては多く第五句目に詠まれるのに対し、当該歌においては第四句目となり、そのことによって「さやの中山」が「命」との関係において強調されていることがわかる。「さやの中山」があるからこそ、西行は「命」を強く意識したのである。

五句目がその「小夜の中山」である。遠江国の歌枕で、現静岡県掛川市東端の峠を指す。「さやのなかやま」が本来だが、「さよのなかやま」と詠まれることもある。『古今集』では「あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ」（恋二・594／紀友則）や「かひがねをさやにも見しがけけれなくよこほりふせるさやの中山」（東歌・1097／よみ人しらず）のように、言葉の繰り返しを詠む場合があり、のちの時代の歌もこれらの歌を踏襲する。ただし、院政期以降になると、「あらし吹くこぐれの雪を打払ひけふこえぬるやさやの中山」（『堀河百首』雑・1364「山」／源師頼）のように、繰り返しを詠まない歌も確認される。当該歌が越えることを詠むのも、『堀河百首』あたりからヒントを得た可能性がある。しかし、ここで重要なのは、西行が「さやの中山」を実際に訪れたという詞書が付されていることである。「さやの中山」を再び訪れた事実は、「命なりけり」という歌句を使うにふさわしい状況だったのであろう。

3、八代集における歌句「命なりけり」

「命なりけり」という表現は、『古今和歌集』から見られる表現である。また、八代集には当該歌を含めて、9首詠まれている（『金葉集』三奏本を含む。当該歌は省略）。これらをまず確認して、「命なりけり」の一般的な表現のあり方を確認しておこう。

題知らず

- ①春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり

〔『古今集』春下・97／よみ人しらず〕

題知らず

- ②今ははや恋死なましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける

〔『古今集』恋二・613／清原深養父〕

やまひにわづらひ侍りける秋、心地のたのもしげなくおほえければ
よみて人のもとにつかはしける

- ③もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり

〔『古今集』哀傷・1332／大江千里〕

つくしへまかるとて、きよいこの命婦におくりける

④年をへてあひみる人の別には惜しき物こそいのちなりけれ

〔『後撰集』離別・1332／小野好古〕

顕季卿家にて恋歌人人よみけるによめる

⑤あふと見てうつつのかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける

〔『金葉集』二度本・恋上・354／藤原顕輔〕

題不知

⑥さりともと思ふころにはかされてしなれぬものはいのちなりけり

〔『金葉集』三奏本・恋下・462／大中臣能宣〕

※『能宣集』では題を「こひ」とする。

題不知

⑦まどろみてさてもやみなばいかかせむ寝覚めぞあらぬ命なりける

〔『千載集』雑中・1140／西住〕

五十首歌よみ侍りけるに、述懐の心を

⑧ながらへて世にすむかひはなけれどもうきにかへたる命なりけり

〔『新古今集』雑下・1768／守覚法親王〕

①③は命のはかなさと景物のうつろいを重ねて（譬えにして）詠まれるパターンの歌である。①は毎年くる春ごとに花の盛りはあるけれど、これに逢えるのは寿命によることだと詠む。③は、風に散る紅葉を見て、命のはかなさに気づく歌である。④は、③が紅葉であるのに対して人との死別によって、命のはかなさに気づくという点で、共通するところがある。

②⑤⑥は恋歌であり、恋情の強さを示すための強調表現として詠まれるパターンである。これらは、『万葉集』において「死」の語が多く「恋死」の意で用いられ、恋の深さを強調するのと軌を一にするものである。②は恋する人からの「あひ見む」という頼みとすべき言葉、⑤は恋しい人を夢に見ることが「命」と同等の価値を持つものと詠む。また、⑥は「相手に期待する心のせいで、死ぬこともできない命であると詠んであり、恋死にも出来ない心の葛藤を覗かせる」⁽²⁾と言及される歌であり、やはり恋の心の深さを強調していると考えられよう。

⑦⑧は普遍性を持つ述懐の心を詠んだものであろう。⑦は佐藤雅代氏が指摘するように「寝覚めの時に実感される「生命」そのもの」⁽³⁾を詠んだ歌である。⑧は

西行没後の『御室五十首』に詠まれた歌であり、つらい経験と引き換えに与えられた命だから、いとおしく思われると詠むのである。

以上についてまとめて考えてみると、⑦⑧は、それぞれ個人の感懐によって発見された生命の真実であるが、多くの人が共有しうる普遍性を持つ内容であり、当該歌のように特定の個人を強く意識させる内容ではない。①③④も同様のことが言えるだろう。

また、②⑤⑥は恋歌の強調表現であり、特定の個人を強く意識させる内容ではない。恋の相手がいるということで、個人的な内容とも言うべきかもしれないが、そこで詠まれた歌は他の恋に於いても転用可能であるという意味で特定の個人に限定させるものではない。

では、当該歌はこれらのほかに何からヒントを得て「命なりけり」と詠み得たのか。それは、『源氏物語』の桐壺更衣の歌ではないかと考えられる。

4. 桐壺更衣詠における歌句「命なりけり」

『源氏物語』に登場する最初の歌は、次の桐壺更衣詠である。『源氏物語』の最初の歌であり、また桐壺更衣の唯一の、そして、最期の歌であるという点で重要である。

「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへしかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむをご覧じはてむと思しめすに、「今日はじむべき祈禱いのりども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

源氏の母である桐壺更衣は病篤く死期が近づき、死を忌むべき宮中から退出しなければならなくなりつつあった。桐壺帝はそんな更衣をまだ近くに留めようとするが、更衣の母の願いによって退出することとなる。帝は、「限りあらむ道に

も後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」と、死出の道も一緒に行くとして約束したのではないか、自分を残していくなと訴える。それに対して、詠まれたのがこの更衣の歌である。「いかまほしきは」には「行く」と「生きる」が掛けられている。

「かぎりとして別るる道」とは、自分が帝と訣別して歩み入るほかないさだめの死出の旅路だが、その道に行くの「行か」に「生かまほし」の「生か」をかけ、死に逆らって生き続けたいと願っている。歌によってのみしたたかに表白しうる激しい混沌たる思いであった。⁽⁴⁾

上記に引用した秋山虔氏の指摘のように、「命なりけり」の上にある「いかまほし」には激しい生への思いを読み取ることが出来る。また、この歌句「いかまほしきは」は先行する和歌に用例がないことによって「その表現が、生きることへの更衣の執着を明確に訴えかけ」⁽⁵⁾ という効果が生じている。

また、この桐壺更衣詠については、桐壺帝の「たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかそこと知るべく」と呼応するとの指摘もあるが、広い文脈としてはそう言えるだろうが、狭い文脈としては独詠歌とまずは捉えるべきであろう。では、この歌は何から喚起されたものであろうか。それが先ほど紹介した帝の言葉である。

帝の言葉と更衣の和歌は「限りあらむ道」と上句の「かぎりとして別るる道」、また「え行きやらじ」と下句の「いかまほしき」とが対応するものであり、「このことから上句で帝の言葉の前半部分を受け、下句で後半部分を受けるもの」⁽⁶⁾ であるという。これについて、益田勝実氏が以下のように指摘する。⁽⁷⁾

「さりともとうち棄てては、え行きやらじ」と、怨みがましくかきくどくが、女は、「かぎりとして別るる道の悲しきに」と運命を諦観し、死を自覚するがゆえに、この愛する人のためにいま切実に生を冀う心持になっていることを歌って、そのくいちがいあまりにもかなしい。この非常の時の激越の情は、思わず歌のしらべを採ってもいる。帝と更衣の会話の「退出させない」「生きたいと思います」というずれ、日常のけの言葉でかきくどくに対して、必死の声をふりしぼってはれのことは歌で応じるくいちがい（後略）

秋山氏が述べているのと同様に日常の言葉ではなく、歌によって述べられたことの意味を重く捉えている。歌でしか表せない強い思いがここには認められる。

また、「いかまほし」という言葉は、先にも触れたように、先行する和歌では用いられない言葉であるが、散文作品には見られる。

御女は十一にて、いとをかしげなり。<いかまほし>と思したるを、<苦しからむ>とて、とどむるを、いとかなしくうち泣かれぬ。

(『落窪物語』巻之四)

いと恋しければ、行かまほしく思ふに、せうとなる人いだきて率て行きたり。

(『更科日記』上洛の旅)

また、『実方集』では歌ではなく、詞書という散文において用いられている。

ある女、いかなる事かありけむ、さらにとはじなどちかひてかへりて、ほどふるほどにいかがおほえけむ、いかまほしかりければ (『実方集』89詞書)

以上のように、散文に用いられていることから、「いかまほし」は日常の言葉、口語的表現であると言った方が良いだろう。これは帝との対話のなかから生まれた和歌だからこそ言い得た表現である。対話だからこそ、歌に日常の言葉が入り込んでしまうのである。

以上のことから、桐壺更衣詠が更衣の生というものを強く意識した歌であることが理解できた。そして、その生は、桐壺更衣の来し方行く末も含まれるものである。行きたい道は未来に続くべき、続いて欲しい道である。物語の展開としては、その生は源氏へと継承されていく。では、なぜこういった桐壺更衣の人生をこの歌は含み得ることが出来たのであろうか。それは「道」という言葉も大きく関わるのではなからうか。いわば「いのちの道」⁽⁸⁾というべきものが、これ以降の人生を歌に読み込むときに使われる「命なりけり」に継承されていくのである。

5、命と道

前節で述べた『源氏物語』の歌には、桐壺更衣という特定の個人を強く意識さ

せるという意味で、西行という特定の個人を強く意識させる当該歌と重なる。また、最後に「道」という言葉に注目したが、実は当該歌においては「道」という言葉は使われていない。しかし、使われていないが、「道」は当該歌にも想起し得る言葉ではなからうか。

それは西行の歌を意識した齋藤茂吉の歌に「道」という言葉があるからである。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

〔『あらたま』大正二年6一本道〕⁽⁹⁾

この歌について、茂吉自身は次のように述べている。

予の歌は秋の一日代々木の原で出来た歌である。左千夫先生追悼號の終の方に予は「秋の一日代々木の原を見わたすと、遠く遠く一本の道が見えてゐる。赤い太陽が團々として轉がると一ぼん道を照りつけた。僕らはこの一ぼん道を歩まねばならぬ。」と記している。〈略〉西行法師の歌が暗々裏に予の頭の中にあつたやうだ。〈略〉この歌は有名な歌であるから予も覚えて居たのであるが、「命なりけり」の意味が予の歌の場合とちがふ。予の歌の場合は「生命である」といつて一命をなげかけた状態である。西行の場合は「年たけて又此山を越ゆるのも存命のゆゑである」といふ意味である。そこが違う点である〈後略〉⁽¹⁰⁾

師事していた伊藤左千夫が亡くなった際に詠まれた歌である。そこには、師から続く歌の道を自分はこれからも歩んでいくのだ、それが自分の「命」なのだと言ひ、そこには茂吉の来し方行く末が含まれている。そして、茂吉はこの歌は西行の歌とは「命なりけり」の重みが違うのだと主張する。それに対して、塚本邦雄氏は次のように指摘する。

(稿者注 茂吉は、「命なりけりさ夜の中山」が暗々裏に頭にあつたが、自分のは違ふと力説してゐるが、言はずもがな蛇足であらう。西行のは「存命」のかたしけなを言ひ、自分のは一命をなげかけた状態の表現だと作者は力説するが、それも微妙な勘違ひと我田引水臭がある。六九歳の西行が三十歳当

時の頃を回想する、その思ひの深さ、賭けて来た命のあはれは、四句切体言止めの文体と不即不離で、単なる一句の比較で済まされては西行が^な吠く。

「命なりけり」という言葉だけを見るのではなく、句のつながり、歌全体を見て西行の歌にも思ひの深さを読み取るべきであると指摘する。ただし、茂吉のこの発言は、それだけこの歌に強い思ひが籠められていることを示すのかもしれない。やはり、ここには桐壺更衣、西行、茂吉へと繋がる、人生の重み、命の道というものが共通して見えてくることがわかる。また、茂吉の言及として次のようなものがあることは注目される。

又結句に「いのちなりけり」としたのが予の歌の新しい点であると思つた。正直をいへば作歌當時は、「命なりけり」といふ結句の歌が古来から無いと思つて居た。〈略〉此事を書かうと思つて、試みに「国歌大観」を見たところが、「命なりけり」といふ結句の歌が十數首ある事を発見して、非常に嬉しくもあり、又意外でもあつた〈後略〉⁽¹¹⁾

茂吉は、結句に「命なりけり」の語があるのが、新しいと考えていた。しかし、第3節で見たように、先行歌の多くは結句に置かれている。むしろ当該歌が四句目に置いてあるほうが特殊である。しかし、茂吉は結句に置いたことが新しいと考えた。これは「命なりけり」と言えば、まず当該歌西行詠がすぐに思ひ出されることの証左であろう。しかも「命なりけり」と言ったときに「道」という言葉までもが想像されるのである。茂吉は、上記のように西行の歌以外を意識していない。すなわち桐壺更衣の歌も視野に入っていなかったのである。西行の歌を通じて、隔世遺伝的に「道」という言葉が顕れてくることは、見逃すことの出来ない現象であろう。ここには、「命の道」が継承されている。

6. おわりに

本稿では、「命なりけり」という歌句の継承を見ることで、そこに「命の道」ともいべきものが形成されていることを指摘した。

「命なりけり」の歌句は、『古今和歌集』から見られる。それらには、恋歌などで

は大切なものだからこそ「命」というものが強調表現として使われ、また恋歌以外では人の世の無常を詠み人間に共通した気付きを詠んでいた。これらは特定の個人の歌に留まらず、多くの人が共有しうる普遍性を持つ内容に昇華できるものである。

それに対して、桐壺更衣、西行、齋藤茂吉の歌は特定の個人というものが強く表に顕れ、そこには「命の道」というべき個々の人生が強烈に訴えられている。

そして、これは『源氏物語』という物語における和歌があったからこそ、成立し得るものであろう。桐壺更衣詠は、物語のなかだからこそ成立する和歌である。普通ならば和歌では使われない「いかまほしき」という言葉が、桐壺帝との対話のなかで浮かび上がり歌に用いられたことで、「命なりけり」は人生を語り得る歌句に変容した。西行の歌も茂吉の歌も、桐壺更衣の歌があることによって、あたかも物語的和歌にちかいものとして歌が成立しているのである。

以上、本稿では人生を詠み込む和歌がどのように成立していくかについての一つのアウトラインを提示した。

注

本文は、『源氏物語』『落窪物語』『更級日記』を新編日本古典文学全集(小学館)、そのほかの和歌を『新編国歌大観』(角川書店)から引用した。

- (1) 当該歌を論じた論考としては以下のもの等があげられる。
浜千代清「命なりけり」私解(『女子大國文』94号、1983)。
大野順一「西行の出家—命なりけり考—」(『文学』54巻10号、岩波書店、1986)。
下西善三郎「喩と象徴—西行と「中山」」(『西行 長明 受容と生成』勉誠出版、2005)。
佐藤雅代「命なりけり」の歌の系譜『山陽論叢』26巻、2019。
- (2) 注(1) 佐藤論文。
- (3) 注(1) 佐藤論文。
- (4) 秋山虔「桐壺帝と桐壺更衣」(『講座 源氏物語の世界〈第一集〉』有斐閣、1980)。
- (5) 植田恭代「『源氏物語』と和歌のことは—桐壺更衣「いのちなりけり」の場合—」(『跡見学園女子大学文学部紀要』47号、2012)。
- (6) 藤河家利昭「桐壺の巻の方法—「いかまほしきは命なりけり」の歌について—」(『源氏物語の源泉受容の方法』勉誠社、1995。1979初出)。藤河家氏はこの指摘について、「既に指摘されているように」と言うが、注(7) 益田勝実の指摘を指すか。なお、新日本古典文学大系の頭注では、「帝の従来からの言葉「限り」「道」や「行く」を借り、生への執着を詠みあげる感じの激し異なる歌」と指摘しており、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 桐壺』(国文学「解釈と鑑賞」別冊)では、この新大系頭注を引用して「この一首に対し、(引用省略。上記と同じ)と詠む最近の注釈もある」と紹介している。
- (7) 益田勝実「日知りの裔の物語」(『火山列島の思想』筑摩書房、1968)。
- (8) 注(5) 植田論文。「更衣の歌は、私が行(生)きたいのは死出の道ではなくて命であったことです。の意であり、補って「いのちの道」くらいに解釈される。生きたいと切実に主張する、

その思いの強さが「いのちなりけり」という表現に結実する詠み方である」と指摘する。

(9) 齋藤茂吉『歌集あらたま』春陽堂、1921。

(10) 齋藤茂吉「命なりけり」という結句』（『童馬漫語』春陽堂、1919）。

(11) 注(10)に同じ。